

目次

■二〇一四年

- 子どもの貧困とスーパーア
ハラー肉と排外ヒステリア 2
- アンチ・ホームレス建築の非人道性 7
- アンチ・ホームレスの鉾が続々と撤去へ 12
- 貧者用ドアとエコノミック・アパルトヘイト 16
- 餓死する人が出た社会、英国編 18
- 英国式『マネーの虎』で失業率を下げる方法 22
- 海辺のジハーディスト 27
- 31
- 地べたから見たグローバリズム——英国人がサンドウィッチを作らなくなる日 38
- 風刺とデモクラシー——今こそ「スピッティング・イメージ・ジャパン」の復活を 44
- トリクルアウトの経済——売られゆくロンドンとディケンズの魂 49

■二〇一五年

- 政治を変えるのはワーキングクラスの女たち 56
- 英国が身代金を払わない理由 61
- フェミニズムとIS問題 65
- 労働者階級の子どもは芸能人にもサッカー選手にもなれない時代 71
- 人気取りの政治と信念の政治 76
- 固定する教育格差——「素晴らしき英国の成人教育」の終焉 81
- 住民投票と国民投票——国の未来は誰が決めるのか 86
- 右翼はLGBTパレードに参加してはいけないのか 91
- スコットランド女性首相、現地版ネトウヨの一掃を宣言 98
- ギリシャ危機は借金問題ではない。階級政治だ 104
- ギリシャ国民投票——六人の経済学者たちは「賛成」か「反対」か 112
- ユーロ圏危機とギリシャ——マーガレット・サッチャーの予言 117
- 英国で感じた戦後七〇年——「謝罪」の先にあるもの 122
- 欧州の移民危機——「人道主義」と「緊縮」のミスマッチ 128
- 再び暴動の足音？ ロンドンがききな臭くなってきた 134

	左翼が大政党を率いるのはムリなのか? — ジェレミー・コーピンの苦悩	139
	ロンドン市長「移民を受け入れないと日本のように経済停滞する」	145
	元人質が語る「ISが空爆より怖がるもの」	151
	右も左も空爆に反対するとき — キヤメロンの戦争とブレアの戦争	157
■	二〇一六年	
	左派はなぜケルンの集団性的暴行について語らないのか	164
	左派に熱狂する欧米のジエネレーシヨンY — 日本の若者に飛び火しない理由	170
	地べたから見た英EU離脱 — 昨日とは違うワーキングクラスの街の風景	178
	英EU離脱の教訓 — 経済政策はすべての層のために機能しなければ爆弾に引火する	185
	ブレグジット・ツーリズム	191
	うたぐり深い政治の時代	193
	ポピュリズムとポピュラリズム — トランプとスペインのポデモスは似ているのか	195
■	二〇一七年	
	『わたしは、ダニエル・ブレイク』はチャリティ映画じゃない。反緊縮映画だ	204
	組合、だいじ。	210

レフトの経済	212
HUMAN(不満)	214
政治に目覚めた庶民たち——「人への投資」が心摺んだ	217
飢える休日	221
命の格差、広がる英国——緊縮財政で医療の質低下	223
ラディカルな政治	227
鉄の天井	229
週四日勤務は夢?	231
二者択一の不条理——EU離脱が招く和平の亀裂	233
■二〇一八年	
もう一つのクリスマス	238
子どもの権利	240
バッド・フード	242
緊縮病「失われた一〇年」——待ちわびる、冬の終焉	244
パスポート狂騒曲	248
中道の貴公子	250

「学校福祉」	252
治安悪化するロンドン——若者への投資、削減の末	254
図書館と薔薇	258
ヒートウエーブ	260
我慢するな	262
女王の「お気持ち」	264
反緊縮モデル国	266
常識は変えられる	268
フードバンク泥棒	270
経済とマインド	272
緊縮とブレグジット	274
親子の仲にも礼儀あり	276
英国の女性参政権一〇〇年——緊縮財政が招く権利後退	278
マンスプレッディング	282
肉税問題	284
健康アプリは不健康？	286
のど飴とメイ首相	288

離脱へのカウント	290
食料砂漠	292
右翼紙の変化	294
非道な税金	297
孤独問題と読書	229
フルカラーの戦争	301
デイストピア	303
若者の時代	305
貧困を直視せぬ指導者——英国のEU離脱	307
黄色いベスト	311
■ 二〇一九年	
EU離脱はどうなつとんねん——リバタリアン・ドリームの崩壊	314
ケチは不道徳	320
あんたらの国	322
ブローケン・ヨーロッパ——希望を持つ勇氣はあるか	324
コービンの失敗	328

格差とシニシズム	330
EU離脱の混沌と子どもたち——後始末負う世代に投資を	332
勝ち過ぎた男	336
大変革時代の英国の教育——長い目で文化格差解消を	338
緑の政治	342
リバランス	344
家なき子	346
暗黒の二〇一〇年代の終焉——英保守党、脱緊縮の総選挙	348
■二〇二〇年	
もつとしなやかに、もつとしたたかに——英労働党が大敗を喫した日に	354
不安と軍隊	361
人か資本か	363
パニック	365
「恐れ」に煽られぬために——新型コロナウィルスと差別	367
新型コロナと社会の屋台骨	371
ジョンソン首相と復活祭の「クリスマス・キャロル」	374

- 階層を超えて 378
- 「愛は無償」と値切るな 380
- 続けた拍手、未来のため——社会に欠かせぬケア仕事 384
- 英サッカーと社会運動 388
- 英国人とマスク 391
- 高速ワクチン 395
- 英国の学校再開 397
- くたばったアルゴリズム——ティーンたちの抗議と目覚め 400
- 歴史とは 404
- 英国のコロナ・エクソダス 406
- 友愛 409
- 「自助」信じたサッチャーの亡霊 411
- 新たな一対九九 415
- 自給自足という幻 417
- コロナ、英国「南北の分断」——原因、地理でなく貧困に 420

テクノポピュリズムの限界——二世紀の禍と正面から向き合うことをまだ先送りにするだろうか

乱れる足並み 432

長期化するコロナ禍 434

心のワクチン 438

一年ひと昔 440

女性の覚醒 444

英王室の公務 446

小さな政府より公助の時代——コロナ禍、見えてきた公益 450

歓迎と受容 454

五輪の因縁 456

子ども信じる教育を——学校というストレス 458

壮大な実験 462

スポーツと多様性 464

この先も「共に生きる」——コロナ・アフガン・EU離脱 466

あとがき 471

● 本書の一頁から一六九頁までは、ブレイディみかこ『ヨーロッパ・コーリング―地べたからのポリティカル・レポート』(二〇一六年、岩波書店刊)にも掲載されたYahoo!ニュース個人の記事より、本書刊行に際して選択して掲載したものとなる。

● 一七〇頁以降は、六つの媒体に執筆されたコラムや時評を新たに収録した。初出が連載の場合も、本書の構成を検討の上、選択したため、連載回のすべてを掲載したとは限らない。

● 本文各章の冒頭日付下の記載は、以下の初出媒体を示す。

Yahoo! Yahoo!ニュース個人

PANIC NTT労働組合機関紙『NTT労組』「PANIC」(二〇一六年一〇月)

欧州季評 『朝日新聞』「欧州季評」(二〇一七年六月)

紙つぶて 『東京新聞』「紙つぶて」(二〇一八年七月～二月)

図書新聞 『図書新聞』新年特大号特集「世界の視座 UK」(二〇一九年、三三八一号・二〇二〇年、三四二九号・二〇二二年、三四七七号)

社会時評 『中日新聞』『東京新聞』『西日本新聞』『北海道新聞』「社会時評」(二〇二〇年

四月～二〇二二年三月)

● いずれの原稿も、本書収録にあたって補筆や整理を施した。

● 本文中の英国通貨ポンドに補った日本円は、二〇一六年までは一六〇円、二〇一七年以降は一五〇円で概算したものである。ポンドは値動きが激しいため、執筆当時の貨幣価値を正確には反映できていないことをご了承賜りたい。

二〇一四年

子どもの貧困とスーパープア

二〇一四年三月一八日 Yahoo!

英国で子どもの貧困の問題がクローズアップされるようになって久しい。

例えば、朝食用のコーンフレークなどを買おうと、パッケージに「子どもたちにブレックファストを」といったスローガンが書かれ、小学生たちがシリアルを食べている写真が印刷されていることがある。「なるほど。朝食を抜いて学校に行く子どもが増えるから、ヘルシー・ライフを推進するために食品会社がキャンペーンをやってるのね」と一見、思える。

しかし、そうではない。あれは「朝食を抜ける」身分の子どもたちではなく、「朝食を食べることができない」子どもたちにブレックファストを与えるキャンペーンなのだ。写真の下に小さく印刷された文字を読んでもれば、「当社は、子どもの飢餓を根絶し、すべての子どもに朝食を与えるためのキャンペーンを行っています」と書かれているのに気づくだろう。

英国の貧民街には、三食ご飯を食べることができない貧しい子どもたちのために、学

校やコミュニティ・センターで、子どもたちに無料で朝食を食べさせている慈善団体のブレックファスト・クラブが存在する。「子どもの飢餓」なんて、いったいいつから英国は発展途上国になったのか、と思ってしまうが、格差の拡大が進むと、先進国にも発展途上国並みの貧しい暮らしを送る人々が出て来る。

一昔前なら、子どもに食事を与えない家庭というと、親がドラッグやアルコールに耽溺して養育放棄しているアンダークラス家庭というイメージで見られた。いわゆるブローケン・ブリテンというやつである。が、現代社会のリアリティは異なる。親が働いている家庭で、子どもたちが満足に食べられないのだ。

先の労働党政権のトニー・ブレア元首相(任期一九九七―二〇〇七年)は二〇一五年までに子どもを貧困を根絶すると宣言した。二〇〇五年までには、七〇万人の英国の子どもたちが貧困から脱出した。これは当時の貧困層の子どもたちの数の四分の一に当たる。彼らの親の多くが仕事に就いたり、生活保護の給付額が上がったりしたせいである。この数字は、国際的にも英国への称賛を集めた。

しかし、二〇〇五年を境に英国では子どもを貧困率が再び上昇を始める。働いている親たちの給与の上昇率を超えて、物価が上がり始めたからである。もはや親が働いていることが貧困から子どもを救う要因ではなくなった。二〇〇五年の時点で、すでに貧困家庭の子どもの約半数が勤労家庭の子どもだったのである。

二〇〇六年に労働党政権の子どもの貧困問題アドバイザーに就任したりサ・ハーカーは、英紙『ガーディアン』(The Guardian)にこう書いている(二〇一四年三月四日)。

「私は労働年金省担当の分野だけにリサーチ対象を絞り、他の省庁が関わった問題には首を突っ込まないつもりだった。だが、そのうち私は社会の格差や不平等性の問題と向き合わずにはいられなくなった。そして最終的には「富の分配、収入、社会における機会の均等性といったより広範な部分で変革が起こらなければ、子どもの貧困が根絶されることはあり得ない」と報告書に書くしかなかった」

二〇一〇年から再び英国の子どもの貧困は減少しているが、これは貧しい家庭が減ったわけではなく、金融危機の影響でミドルクラス家庭でも収入が減り、全家庭の可処分所得の平均が下がったからだ。つまり、それ以前と同じかそれ以下の収入でも、貧困しているとは見なされない家庭が出て来たからである。これに緊縮財政による生活保護の大幅カットが進めば、二〇二〇年までには子どもの貧困は根絶どころか大幅に増大するだろうという。

現在、貧困家庭の六六%が勤労家庭だそうだ。働いても働いても生活苦を強いられ、親も子も食事を抜いているという凄まじい現実が見えてくる。二〇一三年に政府が発表した報告書では、英国の家庭の二七%が貧困しているという(地域別ではマンチェスター中心部がワーストで四七%)。

「世界で七番目にリッチな国が、そうした状況であるという事実は受け入れがたい」と特定非営利活動団体のオックスファム(Oxfam)は言う(『ガーディアン』二〇一四年三月一七日)。

が、これがキャピタリズム(資本主義)を推し進めた国の成れの果てだとすれば、今後の世界は、たとえるなら「リッチ層は世界で七番目にリッチだが、プア層は世界で七番目にプア」みたいな一国二極化というか、国民所得を押し上げているのは一握りのスーパーリッチ層で、下層は世界でも有数のスーパープアというまことに極端な時代になる。世界第三位の経済国である日本でも餓死者が出ているというから、やはり世界はその方向に向かっていくのだろうか。

「キャピタリズムというのは、一定数の無職者を出さなければ成り立たないシステムだ」

英国の映画監督ケン・ローチはそう言ったことがある(二〇一一年放送、BBCニュース24『ハード・トーク』)。七七歳の彼は労働組合を信じる人なので「無職者」という言葉を使ったのだろうか、これは、

「キャピタリズムというのは、一定数のスーパープアを出さなければ成り立たないシステムだ」

と言い換えることもできる。

「無職者を仕事に復帰させる。生活保護制度を見直す」という、子どもの貧困問題への取り組み法は、トニー・ブレア時代から現在まで何ら変わっていない。

だが、そんな小手先だけの政策はまったく機能していない。どころか、状況は悪くなっている。ドラスティックな社会の改革がなければ、二一世紀の下層の子どもたちは飢え続ける。

というようなことは、いちいち素人が指摘しなくとも歴代政権は前世紀からすでにご存知だ。しかし彼らはいつまでも同じような「とりあえず」的な取り組みを続ける。いったいなぜだろう。

本気じゃないからである。

それはちょうど、大企業が社会貢献イメージ戦略の一環として、自社製品のパッケージに「子どもたちにブレックファストを」キャンペーンの写真を載せてみるのと似ている。

それはいつも箱の裏側の一番目立たないところについている。まったく貧困など想像させない、健康そうなモデルの子どもたちが明るい光の中で笑っている。

そしてキャピタリズム社会の忙しい大人たちは、むしやむしやと一箱自分のブレックファストを食べ終わると、そんな写真にはまったく気を留めることもなく、ゴミ箱の中に放る。

ハラール肉と排外ヒステリア

二〇一四年五月二三日 Yahoo!

英国のピザ・エクスプレスというチェーンレストランが、ハラールと呼ばれるイスラム教の流儀で処理した鶏肉を使用していたことがわかり、大きな物議を醸している。

このハラール肉というのは、イスラム教で厳格に定められた屠畜、解体などの方法で処理された肉のことであり、最近ではスーパーなどでも普通に販売されているが、ピザ・エクスプレスはメニューにハラール・チキンを使用していることを明記していないため、イスラム教徒以外の人々も知らずにそれを食べていたことが判明してスキャンダルになったのだ。

ピザ・エクスプレスの客が何も知らずにハラール・チキンを食べていたというのは、つまりこういうことである。彼らが食べていたチキンは喉を斬られて血抜きされた鶏であったということ。そしてその鶏には殺されたときにイスラム教の祈禱が捧げられていたということ。

これが英国民の間でヒステリックなまでのリアクションを生み出しており、何が大騒

ぎの原因なのかというと、それは三つに分類できる。

まず一つ目は宗教的な理由。これはまあ理解できる。イスラム教以外の一神教の宗教の信者が、他の宗教の教義に従って処理されたものを口に入れることは気が引けるということがあるだろう。が、感觸として、こういう理由で本気で怒っている信仰深い英国人は今どきまじらない。

そして、二つ目。大きくクローズアップされているのが、動物愛護の見地からの非難である。つまり、普通に殺されている鶏よりも、ハラール処理で殺されている鶏のほうが、残酷な方法で殺されているというのである。しかし、『ガーディアン』によれば、ハラール・チキンと普通のチキンの屠畜法にはほとんど差はないのだという(二〇一四年五月二一日)。というのも、イスラムの教えでは鶏は生きた状態で喉を切断されなければならぬので「野蛮」と言われるが、英国ではハラール肉になる家畜の八八%が殺される前に麻痺状態にされているという。

一方、一般的なチキンのほうは、鶏を逆さに吊り下げてベルトコンベアで順番に電気ショックを与え、気絶させてから首を斬るか、または巨大なガス室で殺しているという。そうなると、一般的な屠畜法のほうが「優しい殺し方」とは言えない。

動物を愛する人々にとっては「殺されるときに意識があったかどうか」が重要ポイントになるだろうが、その点を消費者にきちんと知らせろというのであれば、レストラン

のメニューや食肉店に「こちらの肉になった動物は無意識のうちに殺されました」というレーベリングが必要なのであって、ハラール肉を表示しろという問題とはまた別物になってくる。

そして三つ目。これが一番根深い。それは宗教や動物愛護とは何ら関係のない国民的パニックである。つまり、「知らないうちにムスリムがこんなところまで……」という心情的な怖れである。右傾化が著しい英国にはいくつかの極右政党が存在するが、その一つである英国国民党(BNP)は、ハラールは「石打ちや首斬りを行う恐ろしい野蛮な文化の慣習」であり、「我々の伝統や慣習を蝕む^{むしば}」と表明している。

ムスリムは現在英国の全人口の5%弱であり、英国で消費されている食肉の12%から一五%がハラール肉だという。が、これがバレーミンガムのようなムスリム人口の高い地域に行けば男児につけられる最もポピュラーな名前のリストに「ムハマド」が入っているし、同地域では二〇五〇年までにはムスリム人口が英国人の数を抜くと言われていた。徐々に国内で拡大していくムスリムの存在感が「国を乗っ取られるかも」という不安につながっているのは間違いない。

イスラモフォビアという言葉もある通り、ムスリムに対する嫌悪感を持つ英国人は少なくない。『ガーディアン』は、「ムスリム」が「生活保護受給者」と同じように英国人の最も醜いヘイト感情の対象になっているのではないかと指摘する(二〇一四年五月一

日)。

ちなみに、無料配布新聞『メトロ』(Metro)に寄せられた読者レターにはこうした意見が書かれていた(二〇一四年五月七日)。

• どうしてハラール肉について語るときだけ人々は動物愛護運動家になるのだろうか。私たちが食べている動物のほとんどは檻に入れられてひどい生活を強いられている。死に方がナイスじゃないということだけを気にするのは変だ。

• イスラム教を信じないのなら、イスラム教の祈禱が肉に影響を及ぼすとは思わないだろうし、動物のことが気になるのなら、最初から肉は食べないだろう。人道的な屠殺は幻想だ。

• ムスリム人口は国内人口のたった5%なのに、後の九五%を排除するのか。自分はどうピザ・エクस्प्रेसには行かない。

• 「気に入らないならピザ・エクस्प्रेसに行かなければいい」という論調はおかしい。ハラール肉を使っていることが消費者に知らされていなかったら、その決断すらできないではないか。

だんだんサッチャーみたいなことを言うようになってきたキャメロン首相(任期二〇一